

Title	声と時 ー阪神淡路大震災期復興住宅住民の記憶と主体ー
Author(s)	高原, 耕平
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/72424
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (高原耕平)

論文題名

声と時
— 阪神淡路大震災期復興住宅住民の記憶と主体 —

論文内容の要旨

【研究の目的と基本的な姿勢】

ひとはどのようにして災いの記憶と共に生きてゆくことができるのだろうか。本論文は、阪神・淡路大震災の後に建てられた復興公営住宅の住民の証言をもとに、この問いを〈声〉＝記憶と主体の連関という視座から読み解いてゆく臨床哲学的探求のこころみである。

ひとや街（また家族、地域共同体、世代、国民）が過去の記憶に関わる在り方は、そうした主体がただ過去の体験の情報を脳や精神の内部に保存するというに留まらない。記憶と主体は互いに関わり合う。その関係は、語る・物語を編む・沈黙する・静かに向き合う・忘却する・震える・忘れてしまっているということをおぼえておく・祈る……といった多様なかたちのもとで保たれ、生きられているものである。

本研究ではこの記憶と主体の相互の関わり合いの有り様を〈声〉と表現する。それはことばのかたちをとった物語として聞こえてくることもあれば、うめき声やうなり声として発せられることもある。明確な意味と力をそなえた、他人や社会を揺さぶるものでもありうるし、自分自身にしかわからない、記憶からささやきかけてくる内なる声でもありうる。声は呼び止め、届き、もしくはかき消される。それを通じてしか、記憶を聞きとることはできない。

問題は、こうした〈声＝記憶-主体連関〉をどのように解釈してゆくことができるかということである。本研究はこの問題圏を時間の営みとして解釈してゆく。記憶と主体の関わりそのものが、人間の時間的な生き方のひとつである。本研究が全体を通じて明らかにするのは、記憶と主体の連関は、その声をもつひとと、それを聞き取ろうとするひとの時間的な同調（シンクロナイズ）を介して開示されてゆくということである。聞き手は語り手の「記憶」だけを探るのではない。記憶をかれの生から切り出して採集することはできない。解釈者が出会うのはつねに、かれの記憶と主体が関わり合っている現在の場面である。

あるひとが自身の記憶をことばで語るという記憶-主体のありかたを、とくに物語と呼ぶことにする。物語において、解釈者は語り手の証言の内容と、かれの語り口を同時に受け取る。このとき、語り手の時間的な営みに、いわば触発され巻き込まれるようにして、聞き手の側にも同様の時間的な運動——記憶と主体の関わりが生じる。この、自己と他者の時間の動きが連動してゆく作用を、本研究は同調と呼ぶ。こうした同調作用は決して特殊なものではなく、わたしたちの日常生活でごく自然に生じていることである。しかし他者の「記憶」を対象とした研究を始めるとしばしば、記憶だけを手早くつかみとろうとしたり、記憶と主体の結びつきを性急に記述したりしてしまう。そのとき、声と時はお互いを失ってそれぞれ解体している。それは災害の続きである。だから、探求の営み全体が同調の試行でなければならない。以上のように、震災体験の記憶と主体の連関を、時間の同調を保ちながら解釈してゆくことが、本研究の基本的な姿勢である。

研究の問いは以下のように集約される。

- (1) 震災の記憶を「忘れてはならない」「風化してしまっている」としばしば言われる。しかし実際に体験したひとびとの記憶への実感はますますこし微妙であり、複雑であるように思われる。そうした震災の記憶を深く持つ復興住宅のひとびとは、自身の記憶に対してどのような関わり方をしてきたのだろうか。
- (2) 証言あるいは物語という仕方でも記憶に関わりなおしてもらったとき、かれらはそれをどのように語るのだろうか。その語り方に、記憶と主体のさまざまなかたちが現れているはずである。
- (3) そうした声のありさまは、物語の聞き手／読み手であるわたしに、どのように現れてくるのだろうか。かれらの〈声〉を、それが帯びる独特の時間を保ったまま受け止めるためには、何が求められるのだろうか。

【論文の構成】

本論文は、序論部、本論I部、本論II部の3部構成をとる。

第1章から第3章までが序論部を構成する。第1章では論文全体の骨格と、阪神淡路大震災の被災地における「記憶」の諸相を研究全体の背景として論述する。

第2章「木の枝が折れるとき： 準備的な記憶論」では、人間が持つ三層の時間（生理的時間、実存的時間、公共的時間）の調和を破壊することを論じる。

第3章「証言・主体・時間： 先行研究の検討」は、災害の記憶に関する研究、とくに阪神淡路大震災に関する先行研究を取り上げ、被災者の証言の用い方という観点から「事例型」と「臨床型」の区別を導入する。臨床型は、研究者と証言者がお互いの時間性を交差させながら遂行される研究であり、証言やライフストーリーの「全文」を収録することが方法上要請されることを示す。

本論I部は第4章と5章から成る。第4章ではアメリカの精神医学者R. J. リフトンの被爆者研究をとりあげ、災厄の後の社会における「罪責感」の広がりを検討する。第5章では阪神淡路大震災の復興事業として建設された復興公営住宅の一般の問題を整理する。以上により、被災地心理における「復興住宅」の位置付けを明らかにする。

本論II部では、研究の主題である復興住宅を訪れ、そこに住むひとびとの物語を聞き、読みなおしてゆく。第6章では、兵庫県X市営A住宅をわたしが訪れ、物語が語られてゆくまでの過程を、主に時間の同調という観点から描き出す。第7章「生きながらえてゆくことの物語」では、A住宅の住民である「ミノルさん」と「夢子さん」の証言／物語を掲載し、語りの時間に追従する「注釈」を付す。第8章「物語を読みなおす」では、第7章の物語を改めて読むという体験を分析し、読むことが物語の語り手の〈声〉（＝記憶-主体の関わり合い）に触発されてゆく時間体験であることを明らかにする。

終章「記憶と主体」では、A住宅の住民が自身の震災体験とその後のライフストーリーを語ったことの意味を改めて考察し、本論文全体の結論として、災害の記憶と共に生きるありかたを「語りの保留」「静かな語り」「笑い」の3点から考察する。

本論文の中核は第7章における2人の復興住宅住民の物語であり、1章から6章までは、その物語に書き手と読み手が少しずつ時間を合わせてゆく過程として配置されている。第8章以降もまた、7章の物語との時間の同調を保ちつつ彼らの証言を読み解いてゆく過程として読まれることを意図した。

【研究の結果】

本研究はA住宅の住民の協力のもとに約4年間かけて進められ、最終的に6名の住民から聞き取り調査を行った。協力者との関係性をたえず反省しつつ、かれらの声に触れてゆくことの実感をできるかぎり丁寧にそのままに論文中に描き出すことをこころがけた。そうした解釈の成果として、(a)復興住宅に20年間住んできたひとびとが「語りの保留」「静かな語り」「笑い」という記憶への関わり方を培っていること、(b)体験・記憶を語ってこなかったこと自体にも被災体験を受け止めてゆく積極的な意味があったこと、(c)過去をふりかえるなかで得られる「節目」の実感は語り手によってさまざまであり、それはそのひとに時間を同調させてゆくことで初めて開示されてゆくこと、これらを明らかにした。

【本研究の意義と特色】

本研究は、災害研究として、また臨床哲学研究として次のような意義と特色を持つ。

災害研究としては、建設後20年以上が経ち、社会的にも学術的にも関心が途絶えつつある復興住宅とその住民の存在に再び焦点を当てたこと、また6名の住民から聞き取り調査を行い、そのうち2名の証言を論文中に収録した点がまず挙げられる。さらに、それらの証言を補足資料としてではなく論文全体の中核に位置付けることを、先行研究の検討をふまえた方法論として／研究論文の表現方法のひとつとして提示・実践している点にも意義がある。さらにまた、災害研究において哲学のアプローチを提示したこと、すなわち被災体験とその後のライフストーリーを記憶と時間の観点から考察し、語られたことばを無時間的な理論へ分析するのではなく、聴き・読んでゆく時間的体験に定位して記述したことも特色である。

臨床哲学のこころみとしては、語られたことばへの時間的なかかわりという物語論を導入することで、証言への接近を、インタビュー・データの分析としてではなく物語への同調として捉えた点である。これにより、物語を「読む」という人文学の本来の方法に定位し、社会学や質的心理学などの人文科学の方法と差異化をこころみた。また研究の方向付けや解釈において、従来の臨床哲学研究において参照されることの多かった現象学ではなく、神学と精神医学をベースとし、そこに質的研究の手法を組み合わせたことである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (高 原 耕 平)			
	(職)		氏 名
論文審査担当者	主 査	大阪大学 准教授	ほんま なほ
	副 査	大阪大学 教授	堀江 剛
	副 査	大阪大学 教授	望月 太郎
	副 査	大阪大学 講師	小西 真理子
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 声と時 — 阪神淡路大震災期復興住宅住民の記憶と主体 —

学位申請者 高原 耕平

論文審査担当者

主査	大阪大学	准教授	ほんま なほ
副査	大阪大学	教授	堀江 剛
副査	大阪大学	教授	望月 太郎
副査	大阪大学	講師	小西 真理子

【論文内容の要旨】

ひとはどのようにして災いの記憶と共に生きてゆくことができるのか。本論文は、阪神・淡路大震災後に建てられた復興公営住宅の住民の証言をもとに、記憶と共に生きる主体について臨床哲学的な探求をおこなう。記憶と主体の相互の関わり合いは、語る、物語を編む、沈黙する、静かに向き合う、忘却する、震える、忘れてしまっていることを忘れる、祈る、という多様なかたちのもとで生きられ、それは〈声〉として私たちを呼び止めもし、またかき消されもする。そのような声を聞き取り、語り手の記憶に出会うことができるのは、つねに、語り手の記憶と主体が関わり合っている現在という時間においてである。あるひとが自身の記憶を語る時、解釈者は語り手によって語られたことと語ることそのものを同時に受け取り、語る声の時間的な営みに触発され巻き込まれ、聞き手の側にも同様の時間的な運動として記憶と主体の関わりが生じる。この自己と他者の時間の動きが連動してゆく作用が同調 (synchronization) と呼ばれる。こうした同調作用はわたしたちの日常生活でごく自然に生じていることであるにもかかわらず、他者の記憶を対象とした研究を始めると、しばしば記憶だけを書きとろうとしたり、記憶と主体の結びつきを無思慮に解いたりしてしまう。そのとき、声と時間は互いを失って解体する。それが災害の反復とならないために、探求の営み全体が同調の試行でなければならない。震災体験の記憶と主体の連関を、時間の同調を保ちながら解釈してゆくことが臨床哲学の課題となる。

本論文は、序論部、本論 I 部、本論 II 部の 3 部構成をとる。第 1 章から第 3 章までが序論部を構成し、第 1 章では論文全体の骨格と、阪神淡路大震災の被災地における「記憶」の諸相が研究全体の背景として示される。第 2 章では、人間が持つ三層の時間（生理的時間、実存的時間、公共的時間）の調和が災害によって破壊されることが論じられる。第 3 章では、災害の記憶に関する研究、とくに阪神淡路大震災に関する先行研究が吟味され、被災者の証言の用い方という観点から「事例型」と「臨床型」の区別を導入される。臨床型は、研究者と証言者が互いの時間性を交差させながら遂行される研究であり、証言の全文を収録することが方法上要請される。

本論 I 部は第 4 章と 5 章から成り、第 4 章ではアメリカの精神医学者 R. J. リフトンの被爆者研究をもとに、災厄の後の社会における「罪責感」の広がりや検討される。第 5 章では阪神淡路大震災の復興事業として建設された復興公営住宅の一般的问题が整理され、被災地心理における「復興住宅」の位置付けを明らかとなる。

本論 II 部において、筆者は研究の主題である復興住宅を訪れ、そこに住むひとびとの物語を聞き、読みなおしてゆく。第 6 章では、筆者が復興住宅を訪れ、物語が語られてゆくまでの過程を、主に時間の同調という観点から描き出される。第 7 章では、住宅の住民の証言・物語と語りの時間に追隨する注釈が提示される。第 8 章では、前章の物語を読むという体験が分析され、読むことが物語の語り手の〈声〉、すなわち記憶-主体の関わり合いに触発されてゆく時間体験であることが明らかにされる。終章では、住宅の住民が自身の震災体験とその後のライフストーリーが語られる意味が論究され、全体の結論として、災害の記憶と共に生きるありかたが、「語りの保留」「静かな語り」「笑い」の 3 つのタイプに分けられること、体験と記憶を語ってこなかったこと自体にも被災体験を受け止めてゆく積極的な意味をもつこと、過去をふりかえるなかで得られる「節目」の実感は語り手によってさまざまであり、それはそのひとに時間を同調させてゆくことで初めて開示されてゆくことが明らかにされる。

なお、全体の分量は A4 判で 156 頁、本論は 400 字詰め原稿用紙にして約 493 枚に相当する。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、これまでの災害・被災者研究を踏まえつつ、復興住宅の住民の協力のもと丹念な聞き取り調査を重ね、住民との生きられた関わりを対象化することを退け、論文全体を通して、人文学的探究の様式としての語りと解釈の実践によって語り手、書き手、読み手の三者の時間が歩みをあわせてゆくプロセスを提示する画期的な論考である。論文の中核をなす第 7 章の復興住宅住民の物語は、語り手と書き手のあいだで往還を繰り返しながら編まれた類い稀な表現であり、古典注解を模倣して付された注釈という形式も独創的である。

災害研究の分野において、社会的にも学術的にも関心が途絶えつつある復興住宅とその住民の存在に再び焦点を当て、住民との長期にわたる交流を経て編まれた記憶の語りを中核に位置づけ、記憶を生きる主体を通して震災以後を描きだすことを、研究とその表現の手法として提示している意義は大きい。また、被災体験とその後の生活を記憶と時間の観点から考察し、語りを主体から切断された無時間的な理論のなかで分析するのではなく、記憶を語る、聴く、読むという主体の時間経験に定位して記述する哲学のアプローチは、その意義が十全には示されていないとはいえ、ライフストーリー研究にとって示唆に富むものといえる。さらに、従来の臨床哲学研究と比較して、インタビュー・データの分析に依拠するのではなく、物語を読むという人文学の実践に定位して社会学や質的心理学などの社会科学の方法と差異化を図り、神学と精神医学を結びつける臨床的研究としてあらたな光を投げかけている点も注目に値する。

他方で、物語的記述を意図して多用される比喩や修辭が、ときに理論的考察のなかにも混入することにより、論旨の明確さを損ない、概念の十分な吟味が疎かになっている点は否めない。たとえば、「静かな語り」が他の記憶への関わりとどのように差異化し、その概念的意味を生じさせているのか、そして聴き手の側に「静かな語り」に耳を傾けさせるものはなにか、などが明らかにされていない。また、本研究の中核となる時間概念の吟味が十分には行き届いておらず、各章のあいだで時間概念に揺れがみられる。さらに臨床的研究としては、研究協力者との交流を重視する一方で研究者としてのポジショニングが曖昧になっており、より広範な読み手に対してどのような研究の意義を提示するのか、など残された課題も少なくない。しかしながら、これらの欠点を補って余りある研究の成果が示されていることは明らかであり、本論文の意義を損なうものでは決してない。以上により、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。